



ハワイ大学日本研究センターでの講演

LocalであったりLocalでなかったり、日本人であったり日本人でなかったりする私――

アイデンティティは流動的なもの

について書かれた本を読むゼミで、「日本人は」に相当する代名詞に私はいつも迷った。weと言うべきなのか、theyと言うべきなのか。そこで話題とされているのが大企業の経営システムであれば私の生活世界とはあまりにかけ離れたところの話で、とても「私たちが」などとは言えない。けれど女性をはじめとするマイノリティ問題について私自身が憤りを感じる時にはやはり「私たちの」と言いたくなる。さらには、日米協会ハワイ支部のボランティアで、ハワイの小学生に日本の小学生のことを話した際にも、私は手を多用していたらしい。私の英語の奇妙な響きもあって、「あなたはオーストラリア人？」と訊いてきた子どもがいた。彼は私を日本人ともLocalとも思えなかったのだろう。



日米協会ハワイ支部での国際交流教育活動

それは、私が期待していたようなはつきりとしたアイデンティティのかたちではなかったけれど今私は、そうした安定しないものこそが、アイデンティティなのだとおもっている。いつもこの頭のなかにある固定したものではなくて、状況のなかで、他者との関係のなかで、揺れ動くもの。流動的で混濁的なものだからこそ、私たちは時に複数の自己を持て余して苦悩しながらも、同時にそこに自らのちからを託すことができるのではないだろうか。二〇〇四年十二月の帰国後も私は、英語を教え始めたり、『合コンの社会学』という本を出版したり、そして二〇〇八年四月からは大学で教鞭をとり校務に携わり、アイデンティティは拡張するばかりだ。その苦しさ喜びを伝えてくれたハワイでの日々は私のなかにもいつも大切なものとしてあり、そして、その機会を与えられたことに心からの感謝を捧げずにはいられない。

中央公論 12月号 発売中!

定価800円(税込)

〒104-8320 東京・京橋2-8-7 中央公論新社
TEL 03-3563-1431

老後を壊す政治

俺の言うとおりにしないと、自民党は終わりだ! 舛添要一
呆れた「年金記録改ざん」の真相 磯村元史
介護の沙汰もカネ次第! 樋口恵子

もはや限界点の看護・介護現場 中島 恵
国を食いつぶすのか
弱者を切り捨てるのか 八代尚宏×近藤克則

政体の末期に人材が
払底するのはなぜか 野口武彦

〈特集〉アメリカニズムの終焉と世界不況 佐伯啓思／田中直毅／堺屋太一ほか

〈特集〉これであなたも作家になれる 日教組 その虚像と実像 小林哲夫

「私」という問い、解けない問い

皇太子奨学文奨学生(二〇〇二年度)。東京大学大学院・ハワイ大学大学院を経て、二〇〇八年四月より現職。専門は社会学、ジェンダー論、日本研究。二〇〇九年二月に『日本女性はどこに居るのか』(勁草書房)を出版予定。

明治学院大学
教養教育センター専任講師

北村 文
きたむら あや



アイデンティティ、ということについて考えてきた。私は誰なのか、この世界のどこに位置していて、どのように他者とかかわることができるのか。

二〇〇二年八月、成田からホノルルを目指した私は、「日本女性のステレオタイプとアイデンティティ」という研究テーマを携え、ナイーヴな期待に満ちていた。国境を越えて暮らす多くの日本女性たちにインタビューをすることで、そして同時に、私自身もまた異文化環境に身を置くことで、「私」の答えが見つかるとおもっていた。

私は「local」にはなれないのか

しかし皮肉なことに、私が最初に知ることになったのは、自分が何であるかではなく、何でないのか、だった。多くの人が多くの出

自をもつハワイでは、人種やエスニシティよりも、ハワイ出身かどうかということに重きがおかれる——『In from here』とか『She is local』というように。当然ながら日本では生まれ育った私は、どんなに日焼けしても、毎日サンダルを履くようになって、localではないけれど、むしろ、「日本からきたお客さま」として丁寧に扱われるときにこそ、私は溶けこむことのできない自分を痛感し、この足下にあるはずのハワイが遠くにあるような気持ちになったものだ。

しかし時どき、私はlocalになることを許されもした。ハワイ大学で行われた学会に参加したとき、ほとんどの参加者がアメリカ本土からの研究者というなかで、友人から初めての英語での研究発表記念に贈られたレイを

●皇太子明仁親王奨学金(二〇〇八年二月に名称変更)は、現在の天皇陛下のご成婚とハワイご訪問を記念して、ハワイの日系人、ホノルル日本商工会議所、経団連を含めたわが国経済界の協力により、一九六〇年に創設された。日米両国の相互理解と友好親善の推進を目的に、ハワイ大学と日本の大学との相互留学を行っている。

身につけて登壇した私は、同じくハワイ大学出身の司会者からlocal girlと紹介された。また、それから半年ほどして、日本から訪れた両親を迎えたワイキキのホテルで従業員と話すなかで、私がハワイ大学で勉強していると知った瞬間に、彼の英語が突然ピジン——ハワイ特有の英語、local talkとして使う——に変わったという経験もある。

私はlocalなのかどうかと問われれば、だから、状況に応じて、と言うほかないだろう。生まれてこのかたオアフ島から出たことがない、という人に比べればまったくのよそ者だけれど、アメリカ本土出身者や日本人観光客に比べればlocalに近い、と。それは私が自分で決められることではない。他者によって時にはじき出され、またある時には招き入れられ、その両方が私なのだというしかない。

「we」か「they」か

さらに私は、自分が日本人なのかどうかについてもジレンマを経験した。たとえば日本